

児または女性
の埋葬施設
と考えら
れる。

2号石蓋
土壙墓も墓
壙を有する
埋葬施設
で、蓋石に
は五枚の花
崗岩の板石
が使用され
ている(同・
3)。蓋石
の隙間には
粘土の目張
りが十分に
施されている。
棺の床面は北
側に作り出し
の枕があり、
赤色顔料も
検出された。

3号石蓋土壙墓は他の埋葬施設と直交する主軸の方位を取る。墓壙は残存していないが、蓋石はすべて残っていた。棺は床面までの深さが約〇・五メートルと当遺跡でもっとも深く、西端で

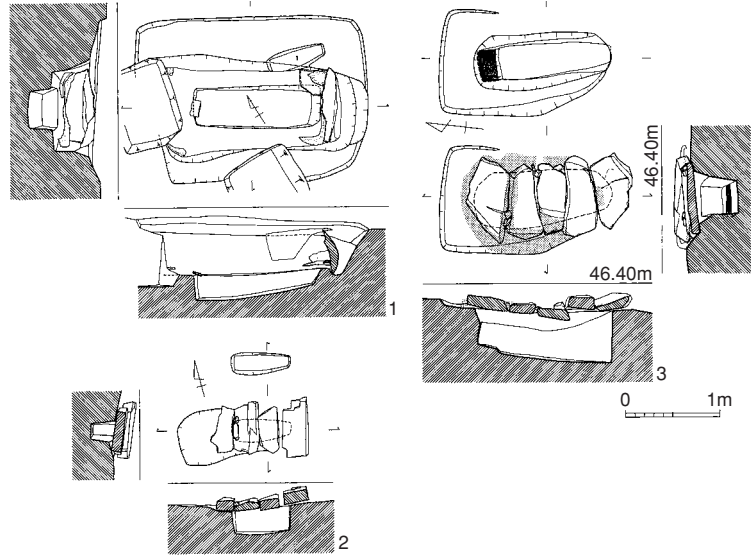


図2—56 亀田南遺跡の石蓋土壙墓

赤色顔料を散布した作り出しの枕が検出されている。
4号石蓋土壙墓は削平が著しく、北側の蓋石一枚を残すのみで、他の蓋石や墓壙は残存していない。棺内北側の床面が高く、この付近に赤色顔料が散布されていたことから、こちらが頭位と考えられる。棺の全長は一・五五メートルと、当遺跡で最長の規模である。

5号土壙墓はもっとも東側に位置する埋葬施設で、長方形の墓壙も検出されている。棺の上面の周囲には粘土帯が広く残存していたことから木蓋を使用していたと考えられる。

当遺跡の埋葬施設の特徴は、棺内に赤色顔料を散布する作り出しの枕が設置されていることである。通常、棺の頭位は床面に傾斜を設けて高くするか、棺の幅を広くする。当遺跡のように高い割合で作り出しの枕が確認された例は少ない。また、第一地点2号土壙墓は他の埋葬施設から独立して立地し、三段掘りの墓壙や、頭の小口部分に板石を立てる特殊な構造を持つことから、「共同体の規制から脱却」した埋葬施設と考えられる。当遺跡の墓地は弥生時代後期から古墳時代前期に営まれたものと考えられる。

六 その他の遺跡

以上詳述してきた町内の主要遺跡のほかにも、住居跡を中心とした集落や、箱式石棺墓・土壙墓・甕棺墓などの墓地に関する

る遺跡が発見されている。また、土器・石器などの遺物も各地で採集されている。ただし、墓地に関する遺跡は出土遺物が少ないため時期の判断が困難なものも多く、一部は古墳時代に及ぶものも含まれると考えられる。

安藤池東遺跡

行橋市下稗田遺跡の北方丘陵上に立地する遺跡である。箱式石棺墓二基・土壙墓三基・甕棺墓三基以上が分布し、石庖丁や石剣の破片が採集されている。住居跡の存在も予想されるが、宅地造成により一部が消滅している。

安藤池西遺跡

町の北東部で、国道二〇一号線に隣接する遺物の散布地である。後期の壺・甕・鉢などが採集されていて、丘陵の裾部に住居跡の存在が考えられている。

原遺跡

庄屋塚古墳の北側約三〇〇メートルの低台地に立地する。土師器とともに弥生土器片が多数採集されていて、住居跡群が分布する可能性があるが、一部は消滅している。

梅林遺跡

黒田神社北側の低丘陵上に立地する遺跡である。箱式石棺墓が八基以上分布し、その一部には墳丘を思わせるものもあり、古墳の可能性があったが、昭和二十八年以降果樹園の造成や採土によって消滅している。

永敬寺裏遺跡

遺跡は黒田神社の西方約二〇〇メートルの丘陵上に立地する。古墳とともに箱式石棺墓と甕棺墓が発見されており、遺跡の範囲は黒田神社付近まで広がるものと考えられる。

二又池東遺跡

綾塚古墳の北方約一〇〇メートルの丘陵頂上部に立地する。昭和二十年以前の果樹園開拓で箱式石棺墓五基以上が消滅し、昭和二十四年に再び開拓で三基が発見された。副葬品として、鉄刀・鉄鏃・ヤリガンナなどが出土しており、古墳時代の遺跡の可能性もある。

勝山中学校遺跡

中学校敷地の北東部に所在する遺物の散布地で、土器片の他に石鏃や黒曜石片が出土している。遺物は北側に隣接する南迫池底でも採集されていて、住居跡群が分布する可能性があるが、一部消滅している。

清地神社遺跡

長川集落の東側の丘陵斜面に立地する遺跡である。神社境内地の拝殿手前で箱式石棺墓が一基だけ確認されたが、消滅している。

小松池西遺跡

池田集落北部に所在する小松池の西側谷部に立地する。谷川の水路で土器片が採集されている。

長川西遺跡

小長川遺跡の南方約三〇〇メートルで、北西から南東にのびる台地の先端部に立地する。道路拡張工事の後に、中期の須玖式土器や石庖丁が発見されている。台地

上に住居跡が分布する可能性がある。

鎮西遺跡

長川集落の西側で、長峡川に突き出した丘陵の裾部に立地する。前期後半の板付Ⅱ式の壺と石製作した工房の可能性のある遺跡である。

亀田池遺跡

亀田池の西側丘陵の先端部から池内にかけて広がる遺跡である。甕棺が露出しているのが確認されており、壺と石庖丁・石剣・石鏃などの石器が採集されている。付近に住居跡の存在が予想される。

キベガ迫遺跡

扇八幡古墳の西方約五〇〇坪の丘陵上に立地する。箱式石棺墓・土壙墓・甕棺墓などが発見されている。

箕田大池遺跡

箕田大池西側の台地から池の岸に広がる。台地上で弥生時代と古墳時代以降の土器片が散布し、岸では石鏃や石斧が採集されている。集落関係の遺跡の可能性がある。

勝山遺跡

当遺跡は勝山中学校遺跡の南側に隣接し、一連の集落関係遺跡と考えられる。

上田遺跡

長峡川が行橋市に入る手前の北側の河岸段丘上で大分八幡神社とその東側に展開する。箱式石棺墓群が発見され、一部で低墳丘が認められることから古墳時代に及ぶ可能性がある遺跡である。神社の石段工事中に箱式石

棺から前漢鏡が出土したと伝えられている。この銅鏡は大正期に宮内庁御用掛で町内上田出身の吉田学軒に送られたとされている。

上田片岸遺跡

上田集落西端の水田中に立地する。水田の畔で複合口縁の壺や甕・杯などの土器が採集されており、終末期の住居跡の存在が予想されている。

上久保遺跡

久保小学校北側の水田中に位置する（写真2-16）。畔で長さ約二三センチの石戈の完形品が採集されており、住居跡等の集落関係の施設が存在する可能性がある。

大藪遺跡

上久保の萬福寺の北東に隣接し、低台地上に立地する。土器片の存在が確認されており、集落が存在する可能性がある。

大藪東遺跡

大藪遺跡の東側に隣接する。箱式石棺墓群と、甕棺墓の可能性がある中期の須玖式土器が出る。



写真2—16 上久保遺跡遠景

土している。箱式石棺墓のうち一〇基以上が採土によって消滅している。

吉松遺跡

中久保の大原八幡神社の南東側に位置する遺跡で、低台地上に立地する。住居跡の存在が予想される。

曼陀羅寺東遺跡

吉松遺跡の東方約二〇〇メートルの低台地上に立地する遺跡である。須恵器・土師器の破片が散在するが、弥生時代の住居跡の存在も予想されている。

高来池西遺跡

平尾集落北東の丘陵の先端部に立地する。ゴルフ場整地の際に住居跡が確認されており、蛤刃石斧や黒曜石片と土器片が採集されているが、遺跡は消滅した。

雁俣池北遺跡

雁俣池北堤防の北側畑地に所在する遺跡で、畑の畔で中期の須玖式の壺・甕と石鏃・石斧などが出土している。住居跡が存在すると考えられる。

平尾西遺跡

町の南東部で、雁俣池の西側台地の北端部に立地する。畑地で箱式石棺墓が確認されたが、大部分が消滅した。ただし、南側の雑木林にはなお残存する可能性がある。また、弥生土器片が採集されており、住居跡の存在も予想される。

上久保南遺跡

上久保集落南部で、南西から北東にのびる丘陵の北端裾部に立地する。箱式石棺墓が多数

存在し、排水工事の際に土壙墓も発見されている。畑地では須恵器・土師器片が採集され、南部には上久保古墳群が所在することから、古墳時代にまたがる遺跡とも考えられるが、一部は消滅した。

大古野池東遺跡

大古野池と小古野池の間で南北にのびる台地から、大古野池の底にかけて分布する。池底で箱式石棺墓、台地上でも箱式石棺墓と甕棺墓が確認されているが、台地部分は蜜柑畑の開墾で破壊されている。

上野遺跡

上野集落の東側畑地に所在する遺跡で、土器や石器片が散在している。白磁や青磁片も採集されていることから、平安・鎌倉時代にかけての遺構の存在も予想される。

下田遺跡

新仲哀隧道入口にある菩提廃寺の北方約二五〇メートルの山麓南東斜面の岩陰に所在する。祭祀関係の遺跡と考えられているが、消滅した。

町内遺跡

以上のことから勝山町内の弥生時代の遺跡の分の展開 布と時期的な展開を概観してみる。京都平野内では海岸部や河川の下流域で前期前葉から中葉の古い時期の遺跡がいくつか発見されているが、平野の奥や河川の中流域では前期後葉ごろから開発が進む傾向がある。町内の最も古い時期の遺跡としては、黒田エノヲ遺跡で中期に数多くの住居と貯蔵穴が営まれるが、前期末ごろからこの低台地周辺に定住が始

まった可能性が考えられ、京都平野内の他地域と同一歩調をとっている。黒田エノヲ遺跡は、京都平野の前期後葉から中期中葉の拠点集落であった下稗田遺跡の北西約一・五^里に位置し、その分村として位置づけられ、主として長峡川北岸の低台地を開拓したものであろう。しかし、後期後半には京都平野西部の拠点集落に成長し、長峡川の中・上流域を共同体の勢力下に置いたと考えられる。この共同体の中で、黒田地区とは別に長峡川南部にも有力な集団の存在が推定される。三島山遺跡内の上所田遺跡では後期の墓地から銅鏡二面が発見されていることから、箕田地区周辺に比較的大きな集落が営まれていたことが予想される。また、長川地区や久保地区にも共同体内の中小集団が存在していたであろう。これらの集団はその後古墳時代を通じて潜在力を高めていき、六世紀代から七世紀初頭には庄屋塚古墳・橘塚古墳・綾塚古墳に象徴されるように、京都平野の最も有力な集団の一つに成長を遂げるのである。

第三節 京築地域の弥生文化

京築地域では縄文時代後期から遺跡が増加するが、弥生時代に入ると水稻耕作に適した地理的な自然環境を舞台に、急激に開発が進み、それに伴って人口も飛躍的に増加した。京都平野や山国川流域などの広い生産地に恵まれた地域では、拠点とな

る大規模集落が営まれ、その周辺部でも比較的小規模な分村が広範囲に展開していた。

ここでは集落と墓地の変遷、更にそこで使われた各種の道具の地域的特徴を通して、弥生時代の京築地域の歴史を概観していくこととする(図2-57・表2-7)。

一 集落の変遷

前期の集落

弥生時代のもっとも古い土器である板付Ⅰ式土器が出土した京築地域の遺跡としては、行橋市長井遺跡と行橋市辻垣畠田・長通遺跡とがある。辻垣畠田・長通遺跡は祇川下流の沖積地に所在する遺跡で、標高約一一^里の低地に立地する。当遺跡は前期の中葉になると東西両側を溝で囲んだ東西約三五^里・南北約一八〇^里の低地性環濠集落を形成する。環濠の内側では四基の貯蔵穴が確認されている。確実な住居跡は発見されていないが、前期中葉から後葉にかけて食料等の財産を河川の氾濫による水害から守るために環濠が機能していたと考えられる。

苅田町葛川遺跡は京都平野北部で、高城山から南方に派生する丘陵上の突端部に立地し、標高は二〇^里前後である。第Ⅰ次調査区では弥生時代の前期と後期の集落関係の遺構が調査されており、前期では環濠集落を形成している(図2-58)。環濠は東西五七^里・南北四三^里の卵形の平面形を呈し、その構造は